「柏崎の水」

大久保の二ツ井戸

鵜川橋を渡り中浜の坂道を 200 メートル程登ると、左側に降りるいわゆる淡島小路（淡島大門とも）がある。50 メートル降った右側に、市指定文化財・史跡、原琢斉・得斉（大久保鋳金工芸の祖）生地跡[1]の標柱と案内板がある。その隣に“二ツ井戸”があり、同所には地下に防火用水の溜が敷設されている。

「柏崎市史資料集民俗篇」[2]に“二ツ井戸”は次のように載っている。

「淡島小路西側にある井戸である。二つあるので夫婦井戸ともいわれ、清水が湧き出ているもので、高台にある大久保や中浜では地下水が低く、井戸掘りで蔵が建つといわれる程に費用がかかるので、この地区の人々が飲料水として多数利用したといわれ、井戸維持のためにその維持費用を利用者から集め、利用者は凡そ 1,400 軒にも及んだという。」

「こどものための柏崎物語」[3]の一項には、東本町と西本町の各井戸の深さを示し、これによって柏崎の砂丘の厚さがわかるとしている。

二ツ井戸　（大久保２丁目９０１）

二ツ井戸・弘法井戸・御膳水・徳照寺・大久保陣屋の井戸

「子供とつづる ふるさと大洲」[4]では、古井戸調査を実施して興味深い結果を出している。

調査井戸は、大洲から番神まで鵜川も含めて 8 ヶ所で、水温と井戸の深さ、地面から水面までの深さを測り、土地の高い所と低い所の井戸を比較している。調査日は平成元年２月１５日１５時となっている。

これによると、どの井戸もほぼ塩分量が同じこと、土地の高い所の井戸は水位が低く、土地の低い所の井戸は水位が高いので、土地の高さに関係なく水位がほぼ同じで、同一の地下水の井戸であることが予想されるとしている。

また、ボーリング資料や地層の観察によって、大洲の大地は安田層の上に番神砂層が覆っていて、番神砂層を通って行った水が、安田層中の“青粘土”と呼ばれている水を通さないシルト層上に溜まり、地下水となっていることをレポートしている。

参考資料

1)「柏崎市の文化財」　柏崎市教育委員会　1982
2)「柏崎市史資料集　民俗篇」　柏崎市史編纂委員会　1986
3)「こどものための柏崎物語」笹川芳三著　柏崎日報社 1960
4)「子供とつづるふるさと大洲」　柏崎市立大洲小学校　1989
5)「大洲村誌原稿」　関甲子次郎筆　1912
6)「柏崎市史資料集　近現代３下」　柏崎市史編纂委員会 1985